大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

<労働>の意味：laborとworkをめぐる萌芽的試論

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊田, 久美子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011254

論　文

<労働>の意味

：laborとworkをめぐる萌芽的試論

伊　田　久美子

「働かない者」の困難

「労働」は私たちが否応なく暮らすこの市場社会を支えるもっとも重要な活動と考えられており「働かない」者、あるいは「働きが悪い」者は肩身の狭い思いをする。フリーター、パラサイト、ニート、引きこもりなどといった現象への憂慮あるいは厳しい指弾は、「働かざる者食うべからず」という倫理の根強さを示している。「働いていない」ことは「遊んでいる」とも表現されるが、そこには明らかに非難、皮肉、引け目等のニュアンスが付着している。

「働く」ことが「カネを稼ぐ」、すなわち市場における経済活動とほとんど同義になったのは、それほど古いことではない。カネを稼がない活動が「労働」とみなされなくなるのは、産業先進地域において男性雇用労働が「労働」の主流となり、女性のライフスタイルの基本が「主婦」となって以降のことである（「一億総中流化」の時代、「女中」の「お手伝いさん」への「格上げ」もむなしく家事労働者が稀少になりほとんど絶滅した60年代後半以降に、この傾向はいっそう強くなっていったように思える）。主婦は「三食昼寝付き」のけっこうなご身分と揶揄され、彼女が負担する家事育児などは「働いている」とは見なされなかった。

しかし70年代後半以降、労働市場に登場しカネを稼ぐ職に就く女性が増えていく。主婦たちは子どもの手が離れるとパート労働などに出て行くようになり、若年女性の中には結婚・出産によって離職しない女性たちが登場する。この変化に伴い、若い女性限定で許容されていた「家事手伝い」という立場もまた消滅していき、労働市場にほとんど参加しない主婦は少数派に転じて「専業主婦」と呼ばれるようになった。労働市場にはコース別人事管理、性別職務分離、さらには雇用形態の多様化などのジェンダー不平等が手を変え品を変え再配置され続けるが、「働かざる者」の肩身の狭さ自体は次第にジェンダー平等へと収斂していくかのようである（「どうして働かないのか」と問われる主婦の苦悩も見聞きする今日この頃である）。男性はと言えば「専業主夫」という生き方は、やや増加している。2003年社会保険庁の2003年度集計によると国民年金第３号

被保険者の女性が減少する一方男性は少数ながら増加傾向が続き、96年度から倍増した。とはいえ、女性のおよそ1101万人に対して男性はおよそ8万人にすぎず、未だにほとんど市民権を得ていない。1992年に男性にも取得が認められている育児休業すらも相変わらず取りにくい状況が続いていて、2,003年度の女性の取得率57.9%に対して男性の取得率は0.55%である。様々な調査によれば、できれば育休をとりたいと思っている男性は少なくないのだが、現状では「働かない」という選択はたとえ一時的にでも困難なのである。

労働概念の拡大としてのジェンダー化とアンペイド・ワーク評価の問題点

しかし主婦（や主夫）が「遊んでいる」のかと言えば、もちろんそうではない。労働力の女性化の一方で、家事などのカネにならない活動が労働であるという認識もまた定着してきた。

70年代の家事労働論争やマルクス主義フェミニズムにおける「不払いの再生産労働」、さらにはWID（開発における女性）による、主に女性が担ってきた「インフォーマル・セクター」の労働の評価は、とくにナイロビ世界女性会議(1985)以降世界的に取り組まれる課題となった。「労働」とみなされない仕事の多くが女性によって担われるという不平等な分担の実態に焦点が当てられ、北京女性会議（1995）以降「アンペイド・ワーク」の評価は各国政府が政策的に取り組むべき課題となった。カネにならない労働であるアンペイド・ワークが「労働」の定義に組み入れられることによって、「労働」の概念は大きく拡大した。「労働概念のジェンダー化」は、この拡大を意味している（上野1995 ,大沢1995)。

しかしこの「労働」の拡大は、「カネを稼ぐ労働」に準じたアンペイド・ワークの評価によってもたらされており、その評価方法は時間利用調査に基づく「カネを稼ぐ労働」への様々な置き換え（RC-S法、RC-G法)、あるいは市場における逸失利益の計算（OC法）によって、精緻化を図ってきた。ヒメルワイトは「従来の労働観が製造業をモデルとしているために、家事労働の中でもとりわけ商品化されにくいケア労働を正当に評価できないのではないか」という懸念を表明し、とくに製造業モデルの「労働」の概念は、サービス労働における労働者と商品としてのサービスの切り離しが困難であり、人格と分ちがたく結びついているという、労働力商品化の困難な性質を指摘している（ヒメルワイト1995)。

資本主義社会における「労働」は、経済的に評価され、カネに換算可能な活動として想定される。市場外にも「労働」はあるというときの「労働」もまた例外ではない。そこでは人間の存在は「労働力の容器」（ダラ・コスタ　1996）に他ならない。

言うまでもなく、こうした人間の定義はそれを批判するために行なわれているのであり、その根底には「人間を『労働力の容器』にしてはならない」という資本主義への異議申し立てが存在

するのである。資本主義に都合良く働かされるのは御免だという感覚である。「労働」とみなされない仕事を労働であると定義して対価を要求することも、同様である。

今日の社会における労働の意味

しかし今日私たちは労働を単に必要に迫られて行う生計のための活動とだけ考えているのではない。今や私たちのライフサイクルの中で、労働は非常に大きな部分を占めており、求められる能力も高度に専門的なものをも含めて多様化している。労働と職業は社会的ステイタスを決定する重要な要素である。前近代の出自にかわって、今日個人の社会的地位の決定要因としての職業上のステイタスの重要性は決定的である。

だからこそ労働は単に経済的収入だけではなく、社会の中に一定の居場所と評価を得る手段でもある。やりがいを感じることができ、人生に意味付与し、生きる目標、生き甲斐にもなりうるものである。しかしながら生計の手段という定義は労働の大前提としてはずすことのできないものであり、そこに生き甲斐という別の要件が付着するようになったと言うべきであろう。

この傾向は、今日ますます強くなっているように思える。近年は市場とは異なる公共圏の活動が注目されてきているが、従来の議論においては女性の社会参加とは労働市場への参加に他ならなかった。公共圏の活動においても経済的評価が無縁な問題であるわけではない。ボランティア活動にさえ「有償ボランティア」という形容矛盾というべき働き方が登場しており、市場と簡単に切り離すことはできないのである。「働かざる者」の肩身の狭さは、稼いでいない後ろめたさだけでなく、生き甲斐を感じ表明できる有意義な人生を送っている（これを「輝いている」などと言う）と言えない引け目のようなものをも含んでいる。経済的評価は市場経済に基づく資本主義社会では必要を満たすための稼ぎであるだけでなく、社会的評価において重要な判断基準を構成していることは否定できない。

ここには様々な「労働」が重なりあっている。生計のためのカネを稼ぐための活動と意義や生き甲斐を感じる活動、あるいは社会に貢献する活動、他者と出会い交流する活動は、それがすべて一致するとすれば、たいへんに幸せなことなのかもしれないが、そんな幸せに恵まれる者はごく少数にすぎないだろう。むしろ本来別々のものの一致が幸せと感じられる世界観それ自体が今日の社会の特徴であると言うべきではないだろうか。ついでに言えば恋愛と結婚の一致というのも近代社会の特徴であることは、これも多くの論者の指摘するところである。ここでも両者の一致に幸福感が付着している。別物の一致はありえないことではないが、実際には比較的希少なことであり、それが「幸福」のハードルを高くして「不幸」を蔓延させているような気もするのである。若者に「夢」を持つようにという説教もまた、彼らの不幸の原因の一部であるように思わ

れる。今日語られる若者の「夢」とは具体的にはほとんど生計の手段と生き甲斐の一致のことだからである。

労働神話の相対化とフェミニズムの困難

—ダラ・コスタ論文の英訳による誤読の可能性

労働とは人間を人間たらしめる「真に人間的な活動」であるとしたのはマルクスである。労働が「生きるための苦役」から人生の目的にまで昇格したのは、少なくとも西欧世界においてはここ200年ほどのことにすぎない。資本主義的労働観の相対化は、マルクス自身を含む多くの論者によって試みられてきた。

フェミニズムもまた資本主義的労働の倫理を相対化することを宿命づけられた思想である。しかしその理論的営為は資本主義的労働から排除されてきた女性の立場からのものであるがゆえに重層的に展開されなければならなかった。女性の立場からの問いは究極的には労働それ自体を問わずにはすまない。しかし市場が支配する社会において女性の生存条件を少しでも改善することもまた、火急の課題である。フェミニズムにおける労働論はその多くが、確かに重要ではあるが、言わば改良主義的次元で展開されてきた。それは労働の平等は、当面の課題としての重要性にもかかわらず、実現がもっとも遅れている領域のひとつであり続けているからである。

だがフェミニストによる労働自体への批判はもちろん存在する。むしろ第二波フェミニズムの初期にはもっともラディカルな労働批判を展開していたのである。ダラ・コスタやミース、ヴェールホフら、「前期マルクス主義フェミニズム」（ソコロフ）の家事労働論はそのような試みのひとつであった。だが英語圏における家事労働論争もマルクス主義フェミニズム論争も、国際的に取り組まれたアンペイド・ワーク論も、労働概念の拡大には成功したが、労働そのものをめぐっての基本的議論に至っていないように思える。私は労働概念を拡大するこの間の議論や方法の検討の意義を十分に評価するものであり、現状におけるその必要性と有効性を確信している。それは今日の社会における女性の生存条件の向上にとって不可欠の課題を明らかにしてきたからである。しかしここであらためて第二波フェミニズムの原点に立ち返って労働そのものの批判的検討をすることは、業績主義的評価に女性たちもまた否応なく巻き込まれていく女性の多様化の局面におけるジェンダー労働論の新しい展開にとって意味のあることではないかと思うのである。

私の長年の疑問のひとつは英語圏における家事労働論争においてダラ・コスタ論文の主張の全体が必ずしも取り上げられておらず、主要に家事労働が労働力商品という交換価値を生む生産労働であるとする論点のみが言及されているように思えることであった。ダラ・コスタ理論の中心であり、彼女をイタリア・ラディカリズムの時代に位置づける「労働の拒否」については、ほと

んど取り上げられていない。ハートマンは例外的に「労働の拒否」に言及しているが、「生産労働の拒否」と誤解して、的はずれの批判を行なっている。しかし英語圏で広く読まれたはずの彼女の論文の主題は拒否の思想そのものである。拒否の思想には英語圏において理解されることの困難な部分が、どこか基本的なところに存在するのではないだろうか。私はかつて、それはイタリアと英米における労働観のちがいなのではないかと考え、若干の考察を試みた。しかし文化的な違いといった漠然とした印象的な指摘の次元を超えることはできなかった。これではイタリア人は働くのが嫌いな怠け者であるという誤ったステレオタイプとたいして違いはないと言わざるをえない。

しかし近年訳文を読み返してあらためて気になったことがある。イタリア語のlavoroが英語訳においては、ほとんどworkと訳されていることである。英語では「労働」を表わす単語としてlaborとworkの二つがあるのに対し、イタリア語で「労働」を表わす単語は今日ほとんどlavoroのみである。もちろん英語においても今日この二つが厳密に使い分けられているわけではないのであるが、多くの辞典が解説するように本来は別の概念であり、今日も多少のニュアンスの違いは無視できない。

しかし概して家事労働やアンペイド・ワークをめぐる議論は西欧言語におけるlaborとworkの区別を曖昧にしたまま展開してきているように思われる。むしろ両者の曖昧な重なりこそが今日の「労働」概念の特徴と言えるかもしれない。実際、現代においては両者の区別は、とりわけ市場活動以外を「労働」と見なしてこなかった経済学的観点からは、無意味なものであろう。「不払い労働」もunpaid workと言われることが多いが、unpaid laborを用いる論者も珍しくはなく、定義上の区別をしているというわけではない。日常言語においても両者の区別は曖昧なものである。英語においては、辞書を繰れば、laborは「生きていくための苦役」、workはやりがいのある自発的な仕事というニュアンスの違いは指摘されているが、使用の実例において、それほどの違いがあるわけではなく、たとえば「労働者階級」という場合の「労働」にはいずれも使用可能である。異なる概念であったworkとlaborは、今日ほとんど同義の言葉として用いられているのである。

この現象をどう考えたらいいのだろうか。市場社会で生きる私たちにとってはlaborにworkが包摂されたと言うべきなのだろうか。それともworkが「苦役」をも含んで、今日的「労働」概念を形成したと言うべきなのだろうか。いずれにせよ、はっきりしているのは、現代においては「生きていくための手段としての労働」のニュアンスを、両者ともはずすことはできず、むしろそうした「労働」が今までになく人生における重要性を増している、ということである。私たちの生活の市場への依存度は、それほどまでに深まっているのである。そう考えるならば、laborとworkの違いの曖昧化と両者の融合こそは、19世紀後半に本格化し20世紀に加速的に拡大した

近代産業社会の特徴のひとつであるとさえ言えるのではないだろうか。

実はこの問題についてはすでにハンナ・アーレントが『人間の条件』において詳細に論じている。アーレントもまた、今日workとlaborはほとんど区別されずに用いられているとしながら、にもかかわらず二つの単語が執拗に維持されてきたことに注目する。アーレントはとくにイタリア語には言及していないが、彼女の考察は以下に見るようにイタリア語には英語以上に典型的に当てはまるのである。

イタリア語におけるworkの不在

イタリア語の「労働」は通常lavoroという単語であり、これが英語のlaborと同じ出自であることは言うまでもない。いずれもラテン語のlaboro（骨折る、努力する、苦労する，困るetc.）に由来する。イタリア共和国憲法の前文にこの単語が登場することはよく知られている。しかしこのことは当然ながらイタリア語を母語とする人々にとっては、「労働」には苦役の負担感のニュアンスが含まれていることを示すものである。

それではアーレントの言う職人的活動であるwork（「仕事」と訳されている）はイタリア語では何と言うのだろうか。実は今日英語圏でworkのようにlaborとほとんど同義に用いられる単語は、イタリア語には存在しない。ラテン語のopusに由来するoperaが、それに当たると言えなくもないが、今日operaは作業、あるいは芸術作品といった意味で用いられ、workと重なる部分がありはするが、英語のworkが通常の現代語として持つニュアンスとは著しく異なるものである。operaには「苦役」のニュアンスはない。しかし「労働者」という単語としてはoperaio/operaiaという派生語が存在し、むしろ「労働」という意味はこちらの方に存在している。ではoperaio/operaiaは専門的技術を持つ職人のような労働者であるのかと言えば、むしろ中世から手間賃をもらって働く労働者（職人ではない）を表わす単語として用いられていた。それが資本主義初期の非熟練単純労働に従事する工場労働者を基本とした労働者を表わす単語となったのである。それはマルクス主義的感情移入を込めて用いられてきた語であるとは言えるが、ともあれ「自らの生産物から疎外された労働に就く搾取された労働者」のイメージは濃厚である。そこでの「労働」は、アーレントの言う「工作人」のworkとは相当に異なる概念であり、workに相当する単語は現代イタリア語には存在しないと言わざるをえないのである。

したがってイタリア語においては、通常の資本主義的意味合いにおいて「労働」を示す言葉はほとんどlavoroだけである。当然そこには英語とは逆にworkのニュアンスを込めた使用もありうると考えられるが、英語の「労働」がどちらかと言えば、苦役のニュアンスを持たず、肯定的

な意味においても用いられるworkに代表されるのに対して、イタリア語のそれがlavoroに代表される、いやlavoroしかないということに、この二つの言語圏における「労働」観の相違が示唆されているのではないだろうか。つまりアングロサクソンの人々が「労働」をやりがいのある肯定的なものとしてとらえる傾向が強いのに対し、イタリア語圏の人々が、できれば避けたい「苦役」としてのニュアンスがまとわりついた「労働」観を基本的に抱いているとしたら、二つの言語による労働をめぐる議論は、この違いに注目した慎重な再検討を行う必要があるだろう。

アーレントの労働論

周知のようにアーレントは労働をlaborとworkに分け、それにactionを加えて人間の活動を三つに分類している。そして西洋言語が英語で言えばworkとlaborに当たる二種類の単語が、今日ほとんど厳密に使い分けられていないにもかかわらず執拗に維持されてきたことに意味を見いだしている。アーレントは前近代においてはっきりと別の概念であったworkとlaborの違いを論じ、ロック、そしてとりわけマルクスにおけるlaborの前代未聞の格上げを批判的に考察する。彼女はlaborが基本的に動詞であり、活動の生産物ではなく過程を表わす言葉であるのに対して、workは基本的に名詞であって、生産物、作品をも表わすと指摘している。このことは、イタリア語におけるoperaとlavoroの違いにも全面的に当てはまる。operaは作業の成果としての作品であり、lavoroは成果にいたるプロセスそのものである。アーレントはlaborを「生命が生きていくための必要にしばられた不可避の不自由な活動」と定義し、それに従事する人間を「労働する動物」と呼んだ。そして近代社会を経済という私的領域が公的に登場した「労働する動物」の社会であると論じ、そこでは「工作人」(職人や芸術家などworkに従事する人々)やaction(公的活動)を行なう古典的な意味での政治家が消滅していると批判した。生命体としての人間が市場社会で生きていくためにカネを稼ぐことが不可欠であるとすれば、家(オイコス)の経済が世界に拡大した今日、すでに述べたようにlaborはもちろんworkも「稼ぐ」ことを暗黙の目的のひとつとした活動として再定義されているし、actionも同様である。

アーレントの労働論の先に見えるもの
—男の労働の格上げと女の労働の格下げもしくは消去

しかし実はアーレントのlaborは多くの人が指摘するように、むしろアンペイド・ワークである家事労働、ケア労働、対人サービス労働を典型として強くイメージさせるものである(その意味で主婦を労働者の原型とみなしたヴェールホフの議論に前提としては通じるものがある)。

したがってロック、スミス、マルクス以降に生じた労働の格上げは、賃金という間接的な生計手段と交換可能な労働の格上げに他ならず、生命の必要に直接的に仕える労働、自由な人間がそこから解放されるべき桎梏として奴隷に割り当てられてきた労働、古代以来の賤視されるべき労働は、近代の労働の格上げによって、逆に労働とはみなされなくなったと考えるべきではないだろうか。ジェンダーによって女性に割り当てられた家事やケアはまさに「みえない労働」であった。アーレントが問題にしなかったオデュッセウスらの家を建てる仕事と男たちの下着を洗うナウシカアの仕事の違いは、近代以降に意味をもつことになるのである。*

アーレントによれば「労働」は人間が生き物としての生命維持、繁殖に必然的な活動である。その生産物は生産されるはしから消費されることを運命づけられている。「労働」は生き物としての人間に係る活動であるがゆえに、ただの生き物とは異なる活動を人間的な活動とする文化においては賤視されてきた。それはファミリーと呼ばれる使用人や奴隷に割り当てられた。

しかし資本主義社会が「労働」の生産物を長期に残すことのできる（少なくともそう信じられている）賃金＝貨幣で置き換えたことの重要性に、アーレントは注意を払ってはいない。だが、これによって賃金労働は工作人の仕事と重なり、それを包摂したのではないだろうか。そして直接生命の維持に仕える非賃金労働、不払い労働は主として女に割り当てられ、格上げされた労働の定義から削除された。

近代資本主義社会は「労働」にかつてない高い価値を与えた。しかしここで価値づけられた「労働」は、すでに前近代社会において賤視されてきた「労働」ではなく、「仕事」を大幅に含むものである。しかしながら「労働」がかつての「労働」のすべてを排除しているのではない。「パンの稼ぎ手」という概念が示すように、生計に必要な労働は前提としてそこに含まれている。ただしそれは生きるための速やかな消費を免れて貯蔵することも可能な貨幣と交換される活動であり、アーレントの言う「世界」に関与する「仕事」へと変化したのである。なぜならこの労働＝仕事観の「世界」はアーレントが批判したように、拡大する市場経済に覆いつくされているからである。生命維持活動であった「労働」のうちの市場を通過する部分はかつてなく格上げされ、格上げされることによって男というジェンダーに割り当てられた（格上げ前の初期の労働者は子どもと女性だった）。近代資本主義社会において、「仕事」との境界を曖昧にしながら膨張してきたのはこの労働なのである。こうして間接的な生計の手段である貨幣を稼ぐことが「仕事」においても「労働」においても必要不可欠の前提となった。市場経済で生きていくためには「労働」はまず第一にカネを稼げる労働でなければならない。そして貨幣は「名声」などの承認とならんで「仕事」の成果の重要な部分を占めてもいる。そこから削除された直接に生命に仕える労働を論じることは、今日の労働が必然的に孕む業績主義、能力主義に対する批判的視座を構成することに他ならない。

紙面と時間が尽きたので、英訳の誤読に伴う誤読の可能性と拒否という戦略については稿をあらためることにする。

参考文献

H.アーレント『人間の条件』(志水速雄訳　筑摩書房　1994)

M.ダラ・コスタ「資本主義と再生」(伊田久美子訳 「情況」1996年6月号)

H.ハートマン「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚」(L.サージェント編『マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚』(田中かず子訳　勁草書房　1991)

S.ヒメルワイト「"無償労働"の発見："労働"概念の拡張の社会的諸結果」(久場嬉子訳『日本女性ジャーナル』20号)

伊田久美子「資本主義批判としてのフェミニズム―女々しい闘いのすすめ―」(「情況」1991年1月号)

大沢真理「労働のジェンダー化」1995 (井上俊他編『ジェンダーの社会学』1995岩波書店)

N.ソコロフ『お金と愛情の間―マルクス主義フェミニズムの展開』江原由美子他訳　勁草書房　1987)

上野千鶴子「『労働』概念のジェンダー化」1995 (『差異の政治学』岩波書店2002)